

【別紙 3】

2018年度 室蘭工業大学国際交流センター
国際共同研修プログラム研修参加報告書（学生）

プログラム参加者 所属・学年・氏名	機械航空創造系学科	学部4年	小山 祥生
引率教員氏名	ひと文化系領域 小野 真嗣	訪問国・協定校名	モンゴル 工業技術大学(IET)

今までに海外の経験は何度かありましたが、発展途上国かつ英語圏でないというモンゴルでの経験は非常に有意義なものでした。主にモンゴルでの生活と、モンゴル高専内での経験について記したいと思います。

まずモンゴルでの生活については、文字が読めない国というのが最初衝撃を受けました。ロシアの影響が強いためか、モンゴル語はキリル文字を用いているため、最初はそもそも何のお店なのかすら、わかりませんでした。私は一年時にロシア語を履修していたため、雰囲気を読み方だけはなんとか理解できたため、モンゴル語の中でも外来語にあたる、レストランやマーケットなどは見つけることができました。また整列、待つという文化がないため、道路事情やレジの待つ文化が日本と違い、割り込みが当たり前ということに驚きました。このような経験は実際に来てみないとわからないことなので、今回参加することができ良かったと感じました。

次にモンゴル高専内での経験については、学生の意識が非常に高いということが一番感じました。特に自分たちの発表を聞いているときに、真剣に聞いてくれたため発表している身としてうれしかったです。彼らは母国語であるモンゴル語に英語を習得しており、日本語も高専から学び始め、日常会話も自分たちとできるレベルに到達していたので、努力している量がとてつもなく、脅威にすら感じました。また先進国から発展途上国への教育のようなプログラムであったということもあり、ヨーロッパ研修に参加した際に比べて、歓迎の雰囲気が強かったのも印象的でした。特に学生たちに街中を案内してもらった際には、相当私たちに気を使ってくれていたようで、こちらとしてもありがたかったのですが、もう少し等身大の彼らと接せるようにこちらも対応してあげればよかったと思いました。機械科としての経験としては、機械工作室での授業が印象的でした。室蘭工業大学ではすでに機械が使える状態で、何を作るかということに焦点が当てられています。一方でモンゴル高専では工作機械が導入されたばかりなので、まず工作機械を正しく使えるように設定する、用意するという機械工学の黎明期のところを行っていました。そのため実際に授業に TA として参加しましたが、学ぶことばかりで自分も 1 学生としてドリル刃のあつかいなど勉強になることが多かったです。特に昨今の日本では機械を修理できる人がいなくなっているといわれているのは、このような経験を今の日本ではできなくなっているからなのではないかと思いました。

今回の研修は 1 週間と短い期間でしたが、1 日 1 日がとても濃い日程で体感的には軽く一か月ほどいたのではないかとこのほど充実したものになりました。他国が日本に倣い、先進国に向かっている姿を身をもって体験できる機会はなかなかできる経験ではないので、このようなプロジェクトに参加させていただきありがとうございました。

- ・ 研究会等でご自身が発表した梗概・要旨・予稿原稿（英語）があれば添付してください。